

Colombia

【コロンビア】

写真・文＝柴田大輔（フォトジャーナリスト）

紛争なき未来へ

カウカ県ハンバロ市。のどかな風景が広がる山間地では激しい暴力が振るわれてきた過去がある。今は「銃声が聞こえない」という平和を人々が実感している



a

万人の行方不明者。この数字の一つ一つに人の顔があり、犠牲となった彼、彼女とつながる家族や友人がその周囲にいる。どれだけ多くの人々が傷ついたのか。

コロンビアでは今、紛争を経験した各地で、歴史を後世に残す「紛争記憶博物館」が造られている。多くは犠牲者の遺族自身が手を取り合い、愛する故人の歴史、故郷の物語を子や孫たちと共有するために造られた。政府が主導したわけではなく、大地に根付く木々のように、それぞれの地域で生まれた。



c

- a. アンティオキア県グラナダ市にある「紛争記憶博物館」には、遺族が持ち寄った犠牲者の写真が貼られている
- b. 紛争を乗り越えた街を見下ろす丘で、語らう恋人たちと出会った。何気ない日常を大切に生きている
- c. 「紛争記憶博物館」には犠牲者一人一人にノートが用意され、訪れる家族や友人が故人へメッセージを残す。何度も訪れ、亡くなった父へ自分の成長を知らせ続ける女性の姿もあった
- d. 2016年4月9日、コロンビア全土で平和への行進が行われ、平和を願う多くの市民が参加した。グラナダ市では、女性が犠牲者に花を手向けていた



b

「この2年間、全く銃声を聞くことがなくなり、落ち着いて眠れるようになったの。これが今、私が実感している平和よ」

居間の椅子に腰掛け、孫をあやす女性が話す。湯気が立つコーヒーカップを彼女がそっと口に運ぶ。柔らかな表情から安堵の気持ちが伝わってきた。

2016年4月、私はコロンビア南西部に位置する山間の集落を訪ねた。その土地は、国内最大の反政府ゲリラであるコロンビア革命軍（以下、FARC）と政府の力が拮抗し、両者の武力衝突に長年巻き込まれてきた。いつ響くか分からない銃声。住民は、薬や身分証などの貴重品をバッグに入れ、すぐ手に取れる場所に置いてから眠りについていった。大きな空と柔らかな山並みが続くのどかな風景に反する暴力が、日常をむしろんだ。

政府とFARCの間での52年に及ぶ紛争には、2016年に終止符が打たれた。2012年から両者の和平交渉が始まると、各地の戦闘は減っていった。冒頭の女性の発言はこれを受けてのことだ。

半世紀を超える紛争は、コロンビアの人々に深い傷を残した。累計で600万人に上る国内避難民、22万人以上といわれる死者と数



d



g



e



f

- e. ナリーニョ県トゥマコ市では、家族を亡くした女性が集まり、編み物をしながら体験を語り合っていた。過去を共有し、つながることで傷を癒やし、現状を変えていこうとする。どんな状況に置かれても、「私たちはもう沈黙しない」を言葉に前へと進む
- f. 若者の有志が集まり、過去の歴史や現在の問題を、ダンスや演劇を通じて社会に訴える
- g. 私がこの兄弟と最初に出会ったのは、彼ら一家が避難民として故郷を去ったばかりの2007年。その後、ナリーニョ県クンバル市の避難先で生活を根付かせ、それぞれが見違えるほど成長していた



紛争の frontline となっていたハンバロ市の集落で、5世代が共に暮らす家族。親族の強い結び付きが人々の生活を支えてきた



隣国エクアドルで難民として暮らす息子へ手紙をしたためる老婦人。彼女は字が書けず、近所の青年に代筆を頼む。「私は元気だから、安心してしっかり働きなさい」と、文面には息子を気遣う母心が溢れていた



コロンビア

1980年茨城県生まれ。2004年から1年間ラテンアメリカを旅し、各地で営まれる生活の多様性にひかれる。06年からコロンビアを中心にペルーやメキシコで先住民族の日常や社会運動、コロンビア難民の取材を続ける。東日本大震災後は、茨城県を中心に農業・漁業などの生産者を取材している。

柴田 大輔 しばただいすけ

コロンビア北西部に位置するグラナダは、1997年から2005年にかけて政府、民兵、ゲリラの各勢力がしのぎを削る地となり、武装組織に拉致された人々と死者の合計が3千人を超え、3万人を超える人々が避難民化した経験を持つ。武装組織からの迫害を恐れ、当時の人々は被害を語ることなく生きてきた。状況が平静を取り戻すと、避難した人が少しずつ戻り、家族を失った人同士が互いの経験を語り合うようになる。父と兄を亡くした女性は当初、胸にしまい込んだ過去を振り返ることが「傷口に塩を塗り込むように痛かった」と話す。それでも「自分だけじゃなかった」と、体験を共有することで心が解きほぐされるのを感じたという。

人の輪は徐々に広がり、今では学生や旅行者など外部からの訪問者が増え、「語り部」となった住民と交流が生まれている。紛争被害者が言う。「和平合意は、私たち自身が幸せになるための、本当の平和建設の始まりなのです。私たち一人一人が平和に責任を持ち、二度と暴力に侵されない社会を築かなければなりません」と、大きな希望とともに、未来を自分たちで築いていく強い意志を語る。

全ての問題が解決されたわけではない。しかし、穏やかな日々 of 大切さを誰よりも知る人々は互いに手を取り合い、力強い一歩を踏み出す。

最も革新的な都市といえば

メデジン



メデジン大聖堂の横を走るメトロ。付近にはコロンビアを代表する芸術家フェルナンド・ボテロの彫刻が並ぶボテロ広場や、国内外の芸術作品を展示するアンティオキア国立美術館がある ©Procolombia

約250万の人口を抱え、山に囲まれた谷間に位置するコロンビア第2の都市メデジン。メデジンは、米日刊紙のウォール・ストリート・ジャーナルなどが実施したコンテストで、2012年の「最も革新的な都市」に選ばれた。一時は治安が悪く危険な都市だったが、1990年代を境に安全を取り戻し、目覚ましい発展を遂げている。

高架鉄道をはじめ、ロープウェイや巨大な屋外エスカレーターなどの都市交通システムが整備され、郊外の山の斜面に住む人々の都心への通勤・通学時間が大幅に短縮した。また、図書館や博物館、学校などの建設も進み、文化の町としての側面も見せている。

メデジンでは、住民が市の予算配分の決定過程に参加している。さまざまな住民グループが組織され、自分たちが地域の主人公であるという意識が強い。コンテストでは交通システムの整備による渋滞や公害の緩和とともに、あらゆる人々が平等な機会を得られたことが評価された。こうした先進的な取り組みは、今や都市開発のモデルとして世界から注目されている。



メデジンで毎年8月に開催される花祭りのポスター。平均気温24度のメデジンは花の栽培に適しており、「常春の町」として知られている ©Julio Cesar Herrera

地球ギャラリー

コロンビアの文化を知ろう!

取材協力・写真提供：駐日コロンビア共和国大使館

ランチタイムにキッチンカーが集まる東京のビジネス街。黄・青・赤のコロンビア国旗がはためく車に並ぶ人たちのお目当ては、アレバ・レジェナだ。アレバとはトウモロコシでできた薄焼きパンのこと。これに肉やマッシュルーム、卵などの具材を挟んだものをアレバ・レジェナと呼ぶ。

アレバはコロンビアやベネズエラの人々にとってソウルフードともいえるほど身近なもの。肉料理や定食の付け合わせにする他、チーズなどを挟みおやつとしても好まれる。「アレバの食べ方はとて

も多彩で、これがアレバだと限定することはできないよ」と語るのは、キッチンカー「Columbita (コロンビータ)」の店主アルメンガ・レオナルドさん。昨年9月から妻の茉美さんと共に都内各地で営業している。

南米食材の販売店では、冷凍アレバや、水で溶いて焼くだけのミックス粉が手に入る。だが、かつてコロンビアの首都ボゴタでレストランを経営していたレオナルドさんのレシピは伝統的かつ本格派だ。外はバリバリ、中はモチモチの食感を楽しもう。

コロンビア人のソウルフードといえば

アレバ



【RECIPE】

●材料(10枚分)

乾燥トウモロコシの粒500g／サラダ油少々

●作り方

- ① たっぶりの水に乾燥トウモロコシの粒を一晩浸して戻す。
- ② ①を圧力鍋に入れて火にかけ、蒸気が出たら30～40分ゆでる。
- ③ ②のお湯を切り、柔らかくなったトウモロコシをすりこ木などでつぶしてペースト状にする。
- ④ 麺棒とのし板にサラダ油を薄く塗った上で③を厚さ1センチぐらいに伸ばし、直径12～13センチほどの丸い型で抜く。
- ⑤ ④をフライパンで油を引かずに両面焼く。その際、片面焼いたら少し触ってみて、フライパンにくっつかないことを確かめてからひっくり返すときれいに焼ける。焼いたアレバに好きなものを挟んで召し上がれ。

【SHOP INFORMATION】

Columbita (コロンビータ)

フードトラックマーケット東銀座
(東京都中央区新橋演舞場横/
毎週月曜11:45～14:00)の他、
イベントなどにも出店。

Tel: 080-3708-1222

Email: columbita.jp@gmail.com

※出店情報はFacebook (<https://www.facebook.com/Columbita.JP/>)
およびInstagram (<https://instagram.com/columbita.jp/>) で確認を。

